

飲水思源

町長 松岡市郎

新しい年と国際化

皆さん、新年明けましておめでとうございます。

東川町は、1985年世界に向かつて写真の町条例を制定し、「写真の町」を宣言した。今ではカメラメーカー、写真関係者、外国からも大変高い評価をいただいている。今日までの継続を考えると、条例制定の意義は大きいものがある。この宣言は、先人が残してくれて無形の大きな財産であり、今では感謝せずに町は語れない。

「名は体をあらわす」という言葉があるが、世界に開かれた町として進展している。本町では海外出身者が仕事や学習に励んでいる。昨年は台湾や韓国から日本語学習のために1カ月間以上滞在した人が70人を超え、30人を超える中国からの若い女性が町内で農業に従事している。「実によく働き、よく学んでいる」と聞く。昨年12月、札幌で開催された日本語検定にも相当数の人が挑戦した。農場で研修するかたわら、「せっかくの機会だから日本語や日本文化をしつかりと体験させたい」という農場経営者の思いからである。

今、いかにすれば中心市街地に元気が

でるか、活性化するか、に腐心している。解決する良薬はなかなか見つからないが、外からの人々を温かく受け入れる心配りと対応がその一助になっている。

町外や海外から多くの人々が来て滞在し、地元住民の方々とさまざまな交流が行われるような仕組み作りが進んできている。周囲を海で囲まれ、外国との交流が少ない日本人にとってはなかなか難しいことも知れないが、平常心で、同じ仲間、隣人として交流することが大切気がする。

新年を迎えて思うに、私たちの先祖が本州や四国などの各県から開拓に入り、「どこのご出身ですか?」と聞くと「香川県」「富山県」「徳島県」「愛媛県」などと語っていたのが20世紀の東川町だった。21世紀に入って11年目ともなり、これからは同じ問いに「中国」「韓国」「カナダ」「台湾」などと国名が出てくる時代に入っているのでは、と。相撲の世界では、テレビの力士紹介を見るにつけ、聞くにつけ、既にこのような時代になっている。異国の人々とも違和感なくお互いに尊敬し、語り合える時代、平和な時代、支え合える新しい時代の始まりになれば、と期待する。

だいせつざんのすがお

大雪山の素顔

山岳ガイド、旭岳ビジターセンター、自然解説員などで活躍する人たちをリレーしています。高山植物、紅葉、雪、動物など「自然の大博物館」といわれる大雪山の素顔が見えてきます。

明けましておめでとうございます

年始は太陽と地球がいちばん近づくころです。しかし、新雪が降り積もるこの時期、太陽を見ない日何日も続くのも普通です。久しぶりに濃紺の空と白い山々を見あげると、しぜん、顔がほころんでしまいます。

姿見から見る旭岳は、真ん中の地獄谷を囲むように、ゴツゴツした岩塔やがけの続く尾根を伸ばしています。しかし頂上のあたりだけは、なんともんびりとしたクジラの背中に似た曲線を描いています。旭岳が見えない日々が続いても、降る雪は日々違い、ひとつとして同じものはなく、ひとつの雪粒もまた、刻々形を変えていき



太陽柱と雪原



十勝岳の山並みとモヤ

ます。青空が巡ってくると、太陽の下にまっすぐな光の柱が立っていたり、遠くの山々のスカイラインをかすかに覆うモヤがまたは微妙に色づいていたり…。冬は単色でも単調でもありません(そこまで言うと、すこし言い過ぎかな?)。

一番近い季節は、また一番寝坊の季節。年始の太陽はお屠蘇(とそ)気分のわれわれの前に午前7時を過ぎてようやく姿を現します。

旭岳ビジターセンター管理主任 菊地 基